

私の研究遍歴と農山村集落の境界儀礼

原 田 敏 丸

私の研究遍歴は太平洋戦争のさなかに始まる。昭和一八年一〇月神宮皇学館大学の予科を戦時短縮で終えて学部国史専攻の課程に進学した時に始まる。国史科の主任教授は喜田新六先生、助教授に新進気鋭の小野壽人先生がおられた。喜田先生は律令時代の税制、小野先生は明治維新史を専門分野としておられた。ほかに国史科の学生に学問的な影響を与えて下さった方に東洋史の内田吟風先生がおられた。私はこれらの先生方の授業をうけつつ、六国史就中続日本紀の記事を一つ々分解してならべなおすようなこまかな作業を必死で試みていた。やがて来るべき軍隊に召集される日を目前にして許された最後の瞬間まで続日本紀に精

力のすべてを打ち込んだという記憶をこの世に残して生死ままならぬ軍隊に身を投じたいと思っていた。やがて本籍地熊本の野砲隊に現役兵として入営することとなったが、この世に生きている間にやるべきことはやったというすがすがしい気分であった。訓練はなんと僅か十日間で天草島の防衛旅団に編入された。以下軍隊生活のことは省くが、終戦で思いがけない生還後母校に帰学できたのも束の間、母校は占領軍総司令部の指令により廃学となった。それまでも社会史・経済史に関心をもっていた私は迷わず九州大文学部文学部に入學して、宮本又次先生の御指導を仰ぐこととした。

当時宮本先生のもとには多くの研究志願者が集まり、江戸時代を専攻するものが多く、筆者も近世の農村史に興味をもつに至り、そこから日本の村に集中することとなった。その後宮本先生はじめ多くの方々のお力添えて滋賀県の彦根にある滋賀大学経済学部で職を奉ずることになり、そこから本格的に近世日本の村に取り組むこととなった。

昭和二〇年代の後半当時滋賀大学では江頭恒治先生が地方に残存する中近世史料の保存と研究の重要性に着目され、史料の調査・収集をはじめておられた。そこに採用された駆け出しの私の主たる任務は滋賀県下（近江）の中近世史料の調査と収集であった。戦前の彦根・高商以来の近江商人研究室が史料館となり、そこに県下各地に保存されてきた当時庶民史料とよばれた主として庄屋文書を収集し保存・研究することが私の主な任務になった。

そのような環境の中で私自身の興味は村共同体にあった。しかし江戸時代の古文書史料によって村共同体の研究をしようと思うと限界があった。何故なら村々に保存されている古文書はほとんど領主による支配・農民の被支配にかかわるものに限られているといつてよい。そのようなわけで村々の古文書を見て歩いていて隔靴搔痒の感になやまされ

ている間に目についたのが村の入り口の道に張り渡された注連縄であった。

近江ではこれを勧請縄もしくは勧請吊という。大和・伊賀ではツナとよばれる所もあるが勧請縄ともよばれている。若狭・丹後ではジャまたは蛇綱（ジャツナ）とよばれ、蛇を象るとされる。これらの習俗は近畿地方特有のものではなく九州・天草の春祈禱の御幣、関東地方では埼玉県下の「フセギ」、千葉県下の「ツナツリ・ミチキリ」が近江・大和の「カンジョウナワ」と同種のもので、村にあだなす悪魔・病魔が入って来ないようにと祈願して行われるものである。最近東北地方とくに秋田県下についてみているが、ここでは村入り口に「ニンギョウサマ」として藁人形をまつる。ところによって「ショウキサマ」あるいは「カシマサマ」として巨大な藁人形を祀り、やはり悪魔・病魔の退散を祈願するのが主流となっている。同じ秋田県にも近畿の注連縄や龍頭のついた下総の注連縄に近いものもあるが、当地方の境界儀礼の最も多い事例は村境に祀る藁人形である。村人にとって神聖な、非凡俗の世界である氏神社は凡俗の世界である村の内におくわけにはいかず、ほとんど必ずといってよいほど集落のはずれか、集落の外におかれて

いる。その位置取りで村人の心の安定が保たれているといつてよい。

氏神社が集落のはずれか、あるいは外に位置しているのは偶然ではなく、神聖な世界と凡俗の世界とを区別するという厳格な観念によるものであったと理解すべきである。この意味では神聖な神の世界も村にあだなすデモンの世界も村人の凡俗な世界とは区別された、同じ側に位置しているといえよう。

このような村人の平和な世界を共同体として護ろうという時に村の内と外の通路がある村の出入り口が精神的な一種緊張の場所となる。その場所に村の平和な生活を守ろうという意識が集中し、一定の共同体的な儀式を生み出すこととなる。そこに現れてくるのが集落の境界儀礼である。

その境界儀礼によって村の平和な生活を守ろうとする意識は全国共通といつてよいが、その現象形態は地方によってさまざまである。筆者が最初に注目して悉皆調査をはじめた近江はほとんど稲藁を縛って作った注連縄でその中央に近江では「とりくぐらず」と呼ばれることの多い村に危害をもたらすものを通さないという意思の表われともいえるべきものを吊るす。これは近江の場合の特徴で村民の意思

を最も明確に示している。

藁人形は東北地方独特のものかと思案するが、不思議なことに房総半島のほぼ中央部山間の一集落に秋田の藁人形そっくりの事例がある。もとより村人は東北地方の模倣であるとは信じていない。不思議といえば集落の出入り口に藁人形を立てて村の安全を願うのが主流を占めている秋田県でその北部には道に張り渡す近江・大和の勧請吊に酷似した事例があり、秋田県南部には龍頭を付した長大な注連縄を村の両入り口の木に懸ける下総の事例に酷似した事例があるが、これらをどのように理解すればよいか、目下思案中である。

以上集落の出入り口を重要視して各地それぞれの形式をもって外部からの悪魔・悪疫の侵入を防ごうとする行事・習慣があることを述べてきたが、これはひとり我が国だけの習慣ではないらしい。東南アジア諸国の山間部集落の集落入り口を縄等で塞ぐ習慣は時折新聞・雑誌等に記載されている。また筆者が実見したものではミュンヘンのドイツ博物館には集落の境界に置くグレンツシュタイン（境界石）が陳列されていて、集落の境界は一種特別な感覚で住民によってとらえられていることが知られる。

そのようなわけで今暫く我が国各地の農山村集落の境界
儀礼を訪ねて旅を続けたいと思っている。

(はらだ としまる・大阪大学名誉教授)